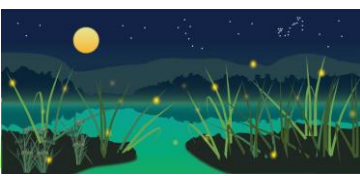


彩の歳時記

平成 二十五年 七月

夏は夜。月のころはさらなり、
闇もなほ、螢の多く飛びちがひたる。
また、ただ一つ二つなど、
ほのかにうち光りて行くもをかし。
雨など降るも、をかし

平安時代の女流作家、清少納言【966～1017?】の枕草子の冒頭「春はあけぼの・・・」に続く一節。夏の夜の描写もまた秀逸です。『源氏物語』に比肩する中古文学の双璧で連歌・俳諧に影響を与え『徒然草』『方丈記』と並び**日本三大随筆**。「今から千年前、多くの国で女性が文字に関わらなかつた時代、このようなエッセーを書く女性が存在したこと自体、驚異だ」と海外からも賞賛されたように、世界文学史上も高い評価。そんな先輩を持った日本女性も、もつと伝統に誇りを持ちたいものです。
こゑはせで身をのみこがす螢こそいふよりまさる思なるらめ「源氏物語 螢の巻」



七月の異称

「文月・文月」。文を披く月「文披月」七夕の短冊に書道の上達を願ったことに因む。

七月の暦

一日 山開き・海開き・童謡の日 ★1918(大正7)年、児童雑誌「赤い鳥」が、児童文学者・鈴木三重吉により創刊されたことに因む。

二日 半夏生【雑節】梅雨末期、天地に毒気が満ち、半夏という毒草が生ずると考えられた。地方によっては蛸(稲の根が蛸の足のように根づくように)を食べる習慣もある。

六く八日

朝顔市

入谷鬼子母神(真源寺) 江戸時代末期に、入谷在住の植木職人が、朝顔を大量に栽培し



七日

小暑【二十四節気】・梅雨も明け、暑さも本格的に。

七夕

盃蘭盆会に帰って来る祖先の霊を迎える為、衣を織った機(たな)の棚(たな)に由来。



これに中国伝来の織女・牽牛伝説が結び附けられ、天の川を隔てた織姫織女星、こと座のベガと彦星(牽牛星、わし座のアルタイル)が年に一度の再会を許される日と言われた。星祭とも。足利織姫神社では「七夕の夕べ」が開催される。



九・十日

ほおずき市

「浅草寺」 7月10日は**功德日**でもっとも多い**四万六千日分の功德**がある日。

十三日 盆迎え火・盃蘭盆会 十六日 盆送り火・精霊流しを行う所も。

十五日

海の日

国民の祝日

第三月曜日

二十二日 土用【雑節】立秋までの約十八日間。丑の日の「丑(う)」とうなぎの「う」の語呂合わせか。

二十三日

大暑

【二十四節気】この日から立秋までが名実ともに暑さの盛り。

羅をゆるやかに着て崩れざる 松本たかし【1906～1956】
羅(うすもの)は紹(さ)や紗(し)など絹の単衣。薄い着物を柔らかく身に纏いながらも毅然とした美しき。



二十四日

河童忌

芸術至上主義の作家・芥川龍之介【1892-1927】の忌日。



「何か僕の将来に対するただぼんやりした不安」を抱いて服毒自殺。
東京、明石町生まれ。東大在学中に書いた「鼻」が夏目漱石に激賞され、若くして人気作家に。「羅生門」「地獄変」「蜘蛛の糸」など。晩年まで住んだ田端の「田端文士村記念館」で、在りし日の映像を観ることができる。

七月の歌

螢 詞 井上尨【1889～1965】 曲 下総皖一【1898年～1962】

尋常小学唱歌三年(昭和七年)。井上は、島根県出身の文部省図書監修官で、国定教科書を編集。松江第一高等の同期に近衛文麿、山本有三、土屋文明。下総は、埼玉県加須市出身、芸大教授で、門下生に團伊玖磨、芥川也寸志等。

螢のやどは 川ばた楊
楊おぼろに夕やみ寄せて
川の目高が 夢見る頃は
ほほ ほたるが灯をとます
川風そよぐ 楊もそよぐ
そよぐ楊に 螢がゆれて
山の三日月 隠れる頃は
ほほ ほたるが飛んで出